

---

B × G

夢のツバサ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

B × G

### 【Zコード】

Z9195C

### 【作者名】

夢のツバサ

### 【あらすじ】

ナチ・クリストファーは私立「バトル文学園」に入学している。普通（？）の16歳ですが・・・毎年この学園では世界対抗学園マッチが行われるバトル学校だった！？

## バトウ伝記（前書き）

数少ない読者の皆様へ

この小説はいろんなネタを引っ掛けているので、分かりにくい所があるかもしれません。が、その所は・・・  
目をつぶつてやってくださいませ。

夢をみた。筆で雑に塗られたようにあいまいだけれど……とても幸せででも、とても怖い夢。

その夢を見ていた少女は目を覚まし、窓を開けた。少し先に今にも飛んでいくくらい翼を広げた、鳥型の遺跡があつた。そういえば・・・この前あそこからすごい何か見つけたつていつてたつけ。少女の目に遺跡が映つた。

その瞬間、光がほとばしった。

「つづ！」少女が声にならない声をもらした。そしておそるおそる目を開けると、少女のめのまえに光り輝く水晶玉が浮いていた。

『むお・・・う・・・とびた・・・つ・・たたかえ・・・守れ・あ・の・こ・・・を・・』水晶が光の渦を巻き、少女に告げる。

「はい・・・わかりました。×××さま」

世界が揺らぎ星が一段と輝いたこの夜、水晶は少女を『守り人』とした。

数千年後

朝霧がたちこめ、一段と寒さをかもし出してるとき、一筋のひかりのみちが伸びた。それを合図に次々と光の道が四方八方に伸びていく。

朝だ。きょうは静かで平和な朝が来た。

「つぎやああああああああああつ！」

いや、訂正。きょうも、ナチ・フォースにはあわただしい朝がきた。

「なんで？！なんでおこしてくんないのぉー！ピッチ！」

寝癖でクッシャクシャになつた髪を必死の形相で直しているナチが、魔法高等ペツト、略して『魔ペツト』に向かつて叫んだ。

【もう、何回も起したデス。っていうかナチの目覚ましになるのは『めんテスよ！】

黄色いはだにウサギのよつな耳、くづくづとした水色のひとみ、そしてせなかに小さな純白のはね。一言で言つと黄色いウサギに羽が生えたような生物が怒ったよつこ、言ひ。

「うつ・・・まあそうですけど・・・」

【ほり、さつさと着替えるテスー早くしないと・・・今日は一時間目は体育ですヨ?】

「うつうつそーー!ハンター先生!ー?エマ・ハンター?ー!」

【はい、そうですよナチ。ハンター先生は遅刻者に腹筋1000回をあたえるそうですね】

「軽々しく言つなーー!んチクショー!他人事と思いやがつてえええ!」

ナチが恨みたつぶりにさけぶ。

【ほり、あと30秒でないと、遅刻ですよ?幸運を。ちなみに私はついてこきませんからね】

じらつと、ペイ

「つーあと28秒！？んじゃつ！行つてきます。ピイ！！」  
そつ言つなり、ナチは電光石火の「」とく、猛ダッシュ。果たして間に合ひのか・・・・？

【・・・今日も平和ですね。】

ぼそつとピイがつぶやいた。

## （第一章）

「私立バトル学園」

「つつセフ！！！つしゃ 奇跡！奇跡だーーー！」

チャイムが校庭に鳴り響く。それを搔き分けるようにナチの声が響いた。

その瞬間、ナチの頭に衝撃が走った。

目が回る・・・こりやオヤジに殴られたときの衝激だ・・・あれ・?  
てか、あたいは誰さ？

ナチが混乱していると追い討ちをかける様に鋭い声が刺さる。

「つつこおつらああああああああああああああああああああああああああん？？！」

ヤクザのようなこんの口調お・・・こつこれは・・・！？

「このアタシ、エマ・ハンターの授業で遅刻するとは・・・いい度胸だねえ！！！」

やつぱり・・・ーーーにつくハントーテacherーーーああ・

・・腹筋1000回・・・

「ナチ・・・・今日は腹筋+スクワット1000回だよ

「ヤクザ口調のくせに』『なんてつけるなあ！！！」

ナチが心の中で叫んだのをハンターは見逃さなかつた。

「おやおや、ナチイ あんたアタシの「」と勘違にしてこるよつだけ  
ど・・・アタシはね・・・とおつてもつ中身もカワコイ乙女なの・  
・・・」

ふつ、あんたもおナチイ おね・・・とおつよつな目でナチを見た。  
「つづ〜！」

あんたに言われたくないよ〜〜とおつよつな目でナチも見返す。  
ほお・・・今日は言い返したわね、ナチ。 あなたもやつと赤ん坊と  
言うレベルを卒業したのかしら・・・? とおつ様な目でハン  
ターも見返した。

こんな・・・腐ったオバちゃんに言われっぱなしさは「めんですから  
ねつ と言つよつな目で、  
ナチもまた見返した。

## 訓練へGO！

結局、ナチは腹筋、スクワット共に1000回をやり遂げ、フラフラしながら、親友のイライザ・シャーンと共に2限目『戦闘術』の教室へと向かつていた。

「つづつ・・・腹が、腹が割れるううう！」

「だよねえ！」

「ううつ・・・太ももが、太ももがもげるううう！」

「だよねえ！」

「ううつ・・・ふくら」

「だよねえ！」

あいまいな返事をするイライザになちはムスッとした。それさえも気づいていない。いつもはすぐ気づくのに。

「イライ」

「つきやあああああああつ！…」

と、いきなりイライザが叫んだ。

「なつ！」

ナチがあまりのボリュームに顔をしかめた。

「クロス先生ステキ！」

イライザがみつめる先に、金髪碧眼のかなりの美形な、クロス・ライト先生がいた。

「・・・・・・・」

恋愛そのものに興味なしのナチにはポカーンとするしかなかつた。

「シャーン君か、おはよう。」

言葉にすら『イケメンオーラー』がただようその言葉に、ナチを除く、通りすがりの女性達の乙女心がつらぬかれた。

「せんせえーつ！！」

周りの生徒（女子）達がいっせいにクロス先生に突進していった。

「・・・・・息・・・・できな・・・い・・・つ」

ナチは自分自身の身の安全を確保すべく、『戦闘術』の授業をするため、更衣室へむかつた。

しばらくして、ナチが真っ黒いスッパツツと『勝つてやるぜ』とプリントされたTシャツを着て、黒髪をきつちり束ねて、出てきた。  
「っしゃー！」

ナチは喝を入れると競技場へとむかっていった。

## 訓練へGO！（後書き）

～これを見ていたいた読者様へ～  
是非、コメントを書いてくださいませっ～～！  
お願いですっ～～！

# 戦闘競技場

さて、これから戦闘授業を行います。

エマ・ハンターの声が拡声器で生徒達に号令をかけた。

『おねがいしま～すっ』

生徒達の声がややダルそうに続く。

それを見たハンターは拡声器を握り潰して、広い競技場に聞こえる  
ような声で怒鳴りつけた。

「つ！ー！」おいらああああああー！ー！何だよその聞くからに軽く50代は行つてそな老けた声は？！

「……よお……？ ああつ？……」  
「…………」

「あ～あまた始まつたね…ハンター名物『若さゆえに…』理論」

と、ナチがハンター理論に負けないような声で隣のイライザにつぶやいた（？）。

「ほんと… ああ見てよ、学園長が寝てるし。あの学園長が寝たといつひとせ…」

「絶対、3時間は続くな！」

ナチが驚愕しながら学園長を見た。

歳のわりには生き生きとして、身長は120cmの超小人、しかし戦闘能力はこの世界で一番の実力

で、『小さい』と言った者を一瞬で半殺しにする。しかも予知能力を持ち合わせ、自分以外の

事を占うことができる。また綺麗な空色の瞳が印象的なバーさんだつた。

「つまり……アタシの体は死んでない……それは」

「ああ……早く戦闘授業がしたい……！」

そうナチが思つた瞬間、いきなり競技場のドアが吹っ飛んで、ナチのそばに轟音をたてて落ちた。

「……」

ハンターは身構え、学園長はいつのまにかナチのすぐ横にたつて前方を静かに見据えた。

砂埃の中から黒いブーツが見えた。

どんづん砂埃がおさまる中、砂埃の中から声がした。

「 いにしへ 」

その瞬間砂埃が一斉に晴れた。

中から黒いボディースーツを着こなしたクールな若い少女が姿を現わす。

「 選考委員会です。 」

「 第四話・終 」

選別委員会（後書き）

なぞの選考委員会、その正体とは……！？

『選考』

闘技場が生徒達の声でいつぱいになつた。

しかし、何人かは『ぼおけえ～』とじていたがナチもその一人だつた。

「ねえイライザ…線香委員つて？」

ナチが、ビヘンシヨウモナイ間違いをして、イライザに聞いた。

その瞬間、イライザは、ナチのまつべを『ヒザカヌウツ～』とひつぱつた。

「ひたい…！はなひていらいは～…ひ～た～ひ～…！」

「『痛い…！放してイライザ～…！』た～い～…！』じゃなあ～い…！」

ナチの言葉を巧みに理解して、イライザが叫んだ。

「やうだぞ…！」

と、ハンターまで参加してきた。

「先生　このナチを真つ青なお空にブン投げたりビヘンすると思いま

す？」

「やあーだなあ～1000円は行くなあたしの！」の豪腕でな～」

とハンターが鍛えられた腕を見せる。

「たしかに行きやつ…絶対行きやつ…～～」

ナチがイライザたちの末恐ろしげに会話を聞きながら、涙目でぞとつた。

そこで、完璧忘れ去られた選考委員が、学園長を除く、全員に気がつかれないよう銃を構えた。

「…私、影薄いんじょつか…？」

そう言つと、少女は轟音を響かせた。

「……」

生徒が一瞬にして静まりかえった。

「私…忘れ去られるの嫌いです」

「あ…すねてる…」

と、頭がさとつた。

「…で、今日はこの通り選考委員会からの使つことしてやつて来ました。

用件はいつです、毎年開かれる少女『ロシアム『B×G』の選手選考に来ました。

なので、1ヶ月後に選手選考バトルを行います。以上です。」

みんなが反応する間もなく、少女は上空に飛び上がり、見えなくなつた。

「スゴイ脚力だなあ……いつか戦ってえ」

皆が唖然としている中、ハンターのんきな声でつぶやいた。

「……なんかすつ」」こ事になつたね、イライザ」

ナチが田をキラキラさせながら、イライザに問いかける。

「……のんきだね」

イライザは死んだような田で、ナチを見て、ため息をつくしかなかつた。

「ああ……遂に始まるんだな……バトルが……」

そして、イライザは青い空を覆い隠そつとしていた黒雲を見上げ、静かに思つた。

## B × G (後書き)

ひさつしづりの投稿です まだまだ未熟ですが、応援してください  
マセ

## 第六話

『命がけの訓練』

「つづわけで、訓練かあいつしー」

ナチが元氣よく叫ぶ。

「…しつかしまあ よお くこんなジャングルで修行しようとも  
つたね…」

連れて来られたイライザがひきつって言つた。

ギヤアギヤアつと鳴く一つ頭のカラス、絶えずなり続ける『ドンドン』と言つ不氣味な音、

大木の幹の長さの5倍の大蛇がそこら辺からぶら下がつていた。

「ヤルなら…命がけの方が殺る氣あるつしょ？」

「何を殺る氣かよ…」

ペーパちゃんみたく舌を可愛く出して、意氣込むナチに、ぐつたりしながらイライザが  
つづこんだ。

「…つてか『ドンドン』？」

「ジャングル」「

「いや、絶対魔窟だとあたしは思つ。断言できる」

「ライザが不機嫌な声でそうつゝ「むと、ナチはしまじま『』へりけ  
ー」と言いながら、ライ

ザの周りをグルグルと回つた後、

「ライザ長官……行くぞ……」

と言い、ライザの着てゐるTシャツを引っ掻み、中へと連行して  
いった。

「ちょつ……ナチイー！アタシを殺す氣か！？」

「そんなことはないぞ！ライザ君！」

「だあ～かあ～らあ～！」

そんなライザの反論も虚しく、ジャングル的な魔窟に入つていつ  
た。

空を覆い隠し、日光を奪い合ひつゝ生えている樹木、豪雨が降り  
注いだ後のよつこグチャグ

チャの地面、その湿度のせいで、長靴が『ペチャペチャ』と音をたて、ナチたちのTシャツもび

つしょり濡れていた。

「ナア～チイ～ぐう～ん ハハビ～ル～

「わ…わからんない…のすよお～」

「ああ～わあ～…つておこ～…なんで?入る前に確認したんでしょ!

!?

「…」

ナチが静かに笑みをうかべた。

「…わすれつちまつたよ、そんなの」

ナチが、落ち蓬んだ田で、ふつとはき捨てた。

「…ー…なつ…なつなああああああああ…」

イライザの悲鳴が密林の中を駆け巡りていった。

## 第六話（後書き）

さてさて… 命がけの訓練の行方は…？

いよいよ期待！！

「な・ん・で！あなたはいつもおーなのつ？…もう、見て御覧なさい…つ！あなた迷う

からわつそく猛動物に『しめしめ…つまそおな人間はつけーん』とか言つ風に見られてんじや

ない……お母さんお母さんそんな子に育てた覚えはあります  
んつ…！」

と、恐怖を紛らわせる為、イライザが半ば自分を失いつつもナチに向かつて怒鳴つちゃいます

「つうへんつ…ぐつ苦しい…たあ～すう～けえ～てえ～…」

と、ナチが首を絞められつつ唸ります。

もつなにがなにやい。

そつやつてこる間にも、猛動物たちはじりじりとナチたちをかこんじやつてこます。

と、その時。そつ、戦隊ヒーロー顔負けのそのときでした。

黒い矢のように、誰かがかつじよく降りてきました。そしてもう倒すわ倒すわ…あっちゅーま

に氣絶している動物さんたちが「ロロロロ…」の間約2分。

あまりの速さにナチたちもビックリしちゃいました。

そのナチたちの命の恩人がふりむきます。

思わずイライザ（ナチ、論外）の感嘆のため息がこぼれてしまいま  
した。それもそのはず…

荒っぽく刈り込んだ金髪に、鋭く、まだ少し温かみのあるビー球  
のようなオーション・ブル

一の瞳。なおかつ整った顔は少し焼けています……まあ一言で言つ  
と、とっても綺麗な16歳頃の男子でした。

怪我  
：

少年の簡潔なセリフにナチたちは一瞬眉をひそめました。

「は？」

ナチたちが異口同音に聞き返しました。

それを見て少年はいくらか慌てたような感じであたふたとしたあと、咳払いをしてこうこうま

「けつ……怪我はないつかつ……！」

『ひつやからかなりのくちべたのようです。それを見たナチはしづらくポケーツとしたあと、

「……ない。ありがと」

と笑顔で答えました。（イライザは熱っぽい瞳で3分おきに『イケメン』…』と呟いていました）

その少年は、耐えかねたように跳躍し、大木の枝へジャンプ。

「あのまつー、お前をつ……！」

イライザがその少年の背中へ叫びました。すると「レイ・ディーゼオ」と返事がきました。

「レイ様」

イライザはいつまでも、その少年の背中を追いかけていました。

「……ちよつとも……訓練はつー?…ねえ　つーーー！」

ナチはそんなイライザをじめこなしましたいつまでも、やがて、いつまでも…

## レイ(後書き)

注：読者の皆様へ

今日は物語風にいたしました。そこんとこよろしくね

あつ…そんな四しないで下さー（泣）

## 風の予感

「エリヒコちゃん…」「エリヒコちゃん…」「

ナチと、イライザが生氣のない声で、つぶやいた。

一人の状態はすこいものだつた。

足はひざまで泥がこびりつた、シャツはとにかく泥と汗でべつちよりで体にへばりついていた。

ていた。

顔も、湿度が高いこのジャングルでは汗だくで気持ちが悪かつた。

「ああ…シャワーが恋しい…こんな世界からおでかけしたい…！」

ひたすらジャングルを歩き続けながら、そんなことを漠然とおもつていた。

イライザもそんな事を考えていたようだ、『シャツ…シャワー…』とのびから声を絞り出していた。

ナチはそんなイライザを一瞥し、空を見上げる。

空は、日光を奪いあおうと、伸びに伸びた樹木で覆われ、光は何一

つ見えて「ジ、冒だと思つ

のこ、ジャングルには薄暗い世界が広がつていた。

「これは試練だ…」

ナチが頭の片隅でかんじた。もつ何日食べてないだろつか？水ももうほとんどない。

これが続けば、ナチたちの未来はない。

本当は食料が確保できるヒリアがあつたはずなのに見えてこない。全くと言つていいほどに。

ナチがそんなことを思つていると …

「ねえ、おかしくない？ いくらなんでもこれはないって…」

うつひな田をナチに向けながら、イライザがいった。

「どう…どうして？」

おなかがすいて気持ち悪い鬱を押さえつつ、ナチが聞き返す。

それにイライザが答えよつと、口を開きかけて…

いきなり、背後の大木の方へと田をやり、投げナイフをかまえる。

「なつ…なにやつ…？」

あまりの速さに田を大きく見開き、ナチが叫ぶ。

その言葉に耳もかさずに、しばらく大木から田をそらすかし、やがて『ふうー』とため息をついた。

「ん、ゴメン。氣のせいみたいだわ。マジめん」

投げナイフを腰に巻いたポーチに入れ込みながら、ナチにいった。

そして、せつときにかけたことを、懇切丁寧に話し始めた。

「…うーむ。鋭いわねえーイライザ。なんで下級ランクに入れられたのかしら?」

さつき、イライザが警戒していた大木の上で選考委員長のエレン・ポーラがつぶやいた。

髪は落ち着いたブロンド。顔は整っていて、肌には一两点の墨りもなく、黒のドレスを着ていた。

そんな格好でじりじりしてここまで上れたのかは、作者も見当つきません。運動神経はいいらしいですが…エレンは。

そしてイライザがナチに話していくことに耳を傾け、小さく笑った。

「ふふっ…鍵をつかんだのね…」

エレンは座っていた木の枝から飛び降りた。

「もつ…始まっているのだから」

モツモツとやくなり、彼女はきえた。

## 嵐の予感（後書き）

えーと……ひつさしづりの投稿ですが…

皆様に楽しめていただければ幸いです（笑）

## 開始

「何がおかしかつて言つとね… 食料ポイントが見つかんないことよー。」

イライザがそう断言する。

どうもおかしいのだ、じつは密かに田畠として、番号つきの小石で鉛球を落としていた。

それがある。地図通り歩いてるはずなのに。これはもう…

「幻術かもね。もつ『B×G』選考始まつてんだよ… 予告なしに選んで本来の力を見る… と

案外、選考委員つてす」こわ。さすが

素直に感心するイライザ。しかし…ナチは呆然とイライザを見ていた。

「す、い…いつからわかつてたの？」

ナチが田を点にしながらつた。

「…? ナチッ あんた気づいてなかつたの…? 今までの授業聞いてた? 授業は寝る時間か!?」

イライザが顔を青くなりながらナチを怒鳴つた。

「すつ…すみません」

頭をたれながら、イライザのお言葉を素直に聞き入れている。

「…とにかく、幻術やぶればいいんだね?」

「そーだけじ…そう簡単には見つかんないと思つんだよねえ…ナチ、あんたは戦闘専門でしょ? 幻術イケル人いたらなあ。うーん。」

イライザが頭の後ろで手を組みながらぼやいた。

「イライザ、なあ〜んかこいつち怪しいんだよねえ…怪氣みたいのがこいつ…ぐこやあーつと…」

ナチが北東の方向を指して囁く。

「ナ…ナチ、でかした。へえ〜幻術けつこいつ才能あるんだね。ナチにこいつや以外。」

イライザが関心のない声で、ひとしきり囁くと、北東の方角へとずんずん進んでいく。

「あつ…ーするーつー! あたしが見つけたのにー!」

「いいじゃん、別に。あたしの腹がもつ限界に達しているの。腹ペコなの。」

蒸し暑いジャングルの中で、ナチとイライザの口論がじさまくの間ひびきわたった。

その上は、学園内のどうか。

「お知らせします、Hレン様。」

全身黒の服で統一した少女がエレンが座っているイスの前でひざまづいて、そういった。

『は、校長に許可なく選考委員がぶん取っているいわば、『基地』だ。

みつかつたら、あの校長は『の委員会の基地をめちゃくちゃにして、笑顔で『うつぶやくだらう』。

『次に私の庭で許可なく遊んで『うんなわ』。命はありますよ』と。

それはそれでね

「報告…ね、何人気づいたのかしら? 今年は校長によると豊作らしいのよねえ」

ため息交じりにHレンはいった。しかし、

（ふつふつふつ…おもしろそうねえ。すこし遊びにいっかやおつかしぃ。今年は豊作だから、選

ぶのせめんどうこねえ）

と、遊園地に行く前の小学生みたいな笑顔でうつぶやいていたり

する。

「…あの選考場所にいるのは15人で、その内の9名です。他の人はいないじてんで落選です。」

少女が、静かに報告する。

「まあ…今年はずいぶん熱心じゃなかつたのねえ。落選者がいつぱい…」

「予告は1ヶ月後でしたので、無理はないと思ひます。」

エレンの感想に律儀に理由を述べる少女。それにエレンはむつとした。

「わ…わかつてゐわよ…それくらいね…」

あわてて、見栄を張るエレン。はつきりいって大人げない。

うつてかわつて、少女はエレンと違つて立派なので、じつこつた。

「そうでしたか。さすがエレン様です。」

無理に、感動したような声をつくり、エレンの機嫌をとる。部下はつらいのであつた。

## 開始（後書き）

さて、始まりました！選考！（一人で盛り上がる作者）

次回も頑張つて、書いていきたいと思いますので。

では…また。

## レビュイとベル

「まつたく、いやんなつちやうねー。」ソリソリのつて

蒸し暑いジャングルのなか、汗一つかかずに一人の、氣の強そうな美女がつぶやく。

少し、赤みがかかったブラウンの髪をお団子に結つていて、赤のタンクトップと麦色の短パン

をきにみ、いかにも活発な感じをかんじさせた。

『レビュイ様…あつい…』

大木の陰から、落ち着いた少女が聞こえた。

「えー、なつさけないねー。それでも『魔ペット』？」

『『魔ペット』を買いかぶりすぎ…。』

そして、大木の幹から、影がひょっこり現れた。

『人がた『魔ペット』だからこそ、人間の症状にちかい…』

そう、声を荒げ（？）少女が言った。

人型の仮面の美少女だった。魔ペットだというのに！

「まあ…そんな格好してりやね」

実際、そうだった。

白の膝丈ワンピースの上に、白地に金縁のボレロ型のジャンパーを着込み、鍔の広い白い帽子

を田深にかぶつていて、いかにも熟しそうだった。

「せひ、じぐよ」

レビィと呼ばれた美女が手まねきしていつ。

魔ペットの少女は仮面のまんまで、レビィの背中にじゅうじゅう乗つておんぶしてもらいつ。

「まつたぐ、甘えんぼだねー…ベルは」

そつ、レビィがいつた瞬間、魔ペットのベルが『ぱほひ』 つと頭にチョップを下した。

「こつたいわねー…」

『レビィ様ひどー…』

広い帽子のつばの影が、ベルの顔を暗く照らした。

その効果もあつてか、こつそう不機嫌さが伺えた。

「…はいはい。でもアタシは悪くないわよつー? いー? ー? ー?」の場合  
アタシが謝つたわけじゅない

からねつ！？

『…』

ベルは、主人の素直さのなさにあきれ返った。

いつものことだから慣れている。いつたい主人はいつになつたらす  
なおになれるのだろうか？

そう、空を仰ぎながら、心の中でベルはつぶやいた。

空はかすかにゆがんでいた。

## レイとベル（後書き）

ついに出来ちゃいました。作者のお気いにいりキャラ、ベル。じつは、クラスの子をモデルにしているんですよ（笑）書くのが楽しみです。

## 集まつていく勇者（？）

ゆがんだ空間にはいつた瞬間ナチ達は背中に冷水をかけられた感じがした。

「…暑かつたからちょいじよかつたわね、ナチ」

イライザが氣分の悪そうな声でいった。

「……」

ナチがこめかみを指で揉み解しながら、うなずいた。

どつも氣分が悪いらしい。イライザはそれ以上訊くのはやめて、コンパスをポケットから取り

出す。

コンパスの針は完全にイカれたらしくグルグルと高速で回っていた。

「……」

さつきまで、きつちりと自分達に方角を教えてくれていたコンパスが、この空間に入つたら、

お釈迦になつてしまつた。

（いつたい、この空間はなんのやら…早く抜けて、シャワー浴びたい…）

さつきから、不快な虫がゾッとするような羽音をたてて、通つてい  
く。

このまままっすぐ行けば食料ポイントにつく様だった。なんせ幻覚  
の空間にあるんだし。

そう、イライザが考えていた時…

『どばばんっ…』『ずしゃっ…』と、音がした。

いそいで彼女は180度方向転換し、武器を構えた。すると、そこ  
には敵が なんてこともなく、

小さな女の子を、おんぶした活発そうな少女がいた。

『 レヴィ様、人』

おんぶされた少女が言つ。

「あ、きみさ、コイシの連れ？」

レビィと呼ばれた少女が、 間髪いれづ、 イライザの眼前に泥まみ  
れの物体をつきだす。

「…」れなに？

イライザが物体から間合ひをとつて、 げつそりとした表情を向け、  
レビィとよばれた少女に

訊ねる。

『ややこしくはたへさんだ!』と叫びそうな勢いである。しかし、泥まみれの物体が、もにょもにょと動き、レイヴィの腕から逃れた。

超ハイスピード・報復全身でイラ  
イザにおそいかつた！

イライザは、たぶん自分の人生で最大の悲鳴を上げ、物体から逃げ惑う。

物体も負けじと追いまわし 最後には彼女の足をつかんでたりする。

「ひつ！」

青い顔で裏返つた悲鳴を上げるイライザ、彼女の運命やいかに！

(「」で、筆者は、黙考する。ホント、『おもしろこつ』言わせるのって大変ですよね…)

集まつていいく勇者（？）（後書き）

ふう～、何とかかけたつ！

遅いとは思いますが、頑張つて皆様に面白いつ  
つていつてくれるようがんばります。w

## 命がけの選考

前回、不思議な物体に追いやられて、ついにこいつがまってしまった  
イライザ…

その物体の正体とは…！？

「ひつー！」

イライザが短く悲鳴を上げた。

ああ…もうおしまいだわ…たつた16年の命、短かったわね…

などと、イライザが勝手に覚悟を決めたとき…

「ひじこよお…イライザア…」

泥まみれの不思議な生命体が声をあげた。

しかも、聞き覚えのある声で。

「まさか…ナチツー…？」

真っ青な顔に冷や汗を浮かべて、イライザが叫んだ。

そして、レヴィと呼ばれた少女たちのまつを向くと、

『やつと『咲』いたんかい、あんた』とでも言ひたげな顔で、しづら  
を眺めている。

「な…なんでこんな風になつちやつたのつ！・ナチャイ！」

イライザが混乱の極みに達し、そう叫んだ。

「いや、その…こきなり『ペペペッ』つい音がした後、泥みたいな  
が降ってきて…」

と、そうナチが言つたとき、ぬつと森の奥からトラが出てきた。

「…」

そこにいた3人（ベルは相変わらず仏頂面）が青ざめた。

そしてトラがイライザに向かつて走り出す。

「ひつ…」

イライザが短い悲鳴を上げた直後

：

「グルルルルッ！」

トラが低いうなり声を上げた直後

：

『ペペッ』

瞬間、トライの右足が乗っていた位置から炎と爆音が膨れ上がり、トライの巨体は弧を描きながら、30mかなたの森へと消えていった。

「……」

爆発地点にほど近かつたイライザとナチは爆風をうけてもんびりうち、レビィとベルはしりもちをつけた。

「たぶん……」「ひー、帶帽だらけだよ」

ナチがボソリ……とつぶやいた。

その場にいた、3人（ベルは相変わらず無表情）が一気に顔から冷や汗を流しだす。

とにかく逃げよう！

ナチとイライザ、そしてレビィとその背中にチヨコソッと乗っているネルが、果敢に一步を踏み出した。

一分前

「ふむふむ……みんな苦戦しているようね。」

巨大な森のあちらこちらから、爆音と濃密な煙がわきあがり、悲鳴と苦痛な泣き声が響いてく

る光景を、上空を飛行中のヘリから双眼鏡で楽しそうにエレンは眺めていた。

「……そのようですね」

エレンの脇にたつて、さう「メントした黒衣の少女が、その様子を顔には出さないが、

『い』の人気が私の上司……か』と、あきれながらつぶやいてたりする。

その後……

すばおおおおおんつ！――

森の中心部付近からひときわ大きい爆発音と共に、巨大な爆煙が立ち上った。

「あらまあ……ひつかかつたのね……」

エレンが、瞳をキラキラさせてそつそつぶやいた。

その様子に気づいたのか、キャビンの方の操縦者の声が聞こえてきた。

「へえ…何にです?」

と、外の方も見ながらエレンに尋ねた。

「貴様：仕事中だぞ。気を緩めるな。それに（仮にも）この方（この人）は貴様よりはるかに地位

が高いのだ。身分をわきまえろ」

と、黒衣の少女が眉間に深いしわを作りながら注意するが、エレンはそれを無視した。

「仕掛けたのはねえ…私のお手製の超高性能爆弾よ

「……」

「こいつやあ～まつさか引っかかってくれるとは…きっとみんな重傷でしじうねえ」

子供のような笑顔を浮かべて、さりと、とそんな容赦のないセリフを言つてのける田の前の

上司に恐怖感を覚えたのか、操縦者は黙り込み、静かに十字を切り始め、被害者の冥福を祈り

始めた。

黒衣に少女は、操縦者のその行動を『仕事中だぞ』などじかる気などこれっぽちも湧かず、

「そのまま続けてやれ

とだけ言い残し、静かにあの、爆心地を哀れみのこもった瞳でながめた。

その爆心地とやらが、ナチたちがいる場所だつたりする。

## 命がけの選考（後書き）

…いやあ、ナチたちは無事なんでしょうが…

ちよつと作者にもわかりません。ぐすんつ。

ちなみに、エレンのキャラですが、わたしの姉がモデ

ルだつたりします。

…ホント怖いです。ハイ。鬼です。

「……うう……げほっ、なんなのや…」

ぼろ雑巾みたいにあわらひらひら、よじれ、気絶していくイライザたちの中でひとりナチはから

うじてやつてぶやいた。

なんで……あたしだけこんな罪に一回もはまらんだり……。過去に村長さんのカツラをかくした

せいだらつか。それとも、サボって校長のおかし全部食つたむくいだらつか……

などと、じんだけひびい田にあつたせいか、かなりネガティブに過去の罪の数々を振り返る。

そんな「んな、振り返つてる間に」、残りのメンバーが起き始める。

「ぐつ……なんなんだこの罪…殺す氣かっ！」

起きるなり、大声で叫ぶレガイ。わらわの罪のダメージなどびい吹く風だ。

「たし……かに……ね、こりや本氣で殺す氣だつたんじやない?・製作者にもう純すいに殺意しかわ

かないわ……マジで」

と青筋浮かべながら、イライザが言い放った。

「…と、とにかく早く行かなきや…ね選考つて言つても、リラシード  
はあるはずだし」

そうナチがつぶやき、口々々々と立ち上がる。残りのメンバーもそ  
れに随つて歩き出した。

(ベルはおんぶ)

やつこつて、一回は歩き出す。

しばらく行つて、分かれ道があつた。腐りかけた木の看板があつて  
『左は…』『け右は…』がつてとどけられた。腐つて見えない  
看板だつた。

「なんじゅうじゅうや、頼りになんないねえ

汗をぬぐいながら、ナチがつぶやく。さつとオチからすれば、どち  
らかが崖である。

「じつはどつ選ぶべきか…

『おひら』

いきなり、レビューオンブされたいたベルがほつそりした指を左の

方角にせしながらこつた。

「 もうか、じゅあ！」 とな

ヒナホヒライザガ頭に『 はてなマーク』 をこへつも浮かべてゐ中、  
わいつわと歩き出しちま

う。

「 もう… もう… とまつて… 」

わいつわと左にこへレグイをライザガ呼びとゐる。

「 ？」

「 こや… ものですね？ ビーして左なんじょつか… 」

遠慮がちにライザガ聞くヒ、レグイは『 ああ』 とふわへりふや  
た。

「 ヤーこやまだこつてなかつたわね、ベルはねりつと特殊な能力  
があつて… 」

レグイがせつ切り出したと、おんぶしたベルが肩越してひりを  
向く。

わいつわまで空色だった瞳が、金色になつていた。

## 能力（後書き）

ども、作者の夢のツバサです（・ω・ゝ）

冬休みの宿題が思いのほか終わらないし、年賀状は

ありますわで… 12月いそがしい…

でも！それを乗り越えるのだ自分っ！

つてことで、また投稿は遅くなりますけど、実力考查

が終わつたらソッコー書くんで！

ではつ 良いお年を（・ω・ゝ）

「ベルはね、靈能力が備わってる魔ペットなのよね。だから、瞳の色が変わるとこりいう事け

「うわああたるワケ」

おんぶしているベルを指差しながら、得意げにレヴィはいった。

「へえ……す、いのね、ベルちゃん

「うわあー！超す、じゃんつ。つひのペイとは大違ひだよー。」

と、口々にイライザとナチが感心した。

レヴィは『もつと褒めたたえなつ！』といわんばかりに、胸をそらしている。

ベルはそんな『主人をあきれた目でみやつた。

「さ、行くわよ、つ……！」

レヴィは賞賛の眼とあきれた眼が入り混じつた視線の中で、意氣込んだ後、すんすんと左の方

向へ進んでいく。

その時、めずらしくベルが『主人をまの背から飛び降り、自分の足で歩き始めた。

「あらへ・ビリしたのよ。ベル。いきなり降り……」

と、やつれまですぐ前をあるこでいたレビイが言葉の途中で消えた。

『一』

ナチヒイライザが驚いてる間にも、ベルもすべに消えてしまった。

「こつたこぢうこじ」と……

と、居なくなつた付近に近づいていたイライザの姿も途中で搔き消えた。

「イライ……」

ナチが驚愕した表情で、イライザが居た場所に走りよつた。

その瞬間、足元から地面がきえた。

「え……？」

下はとんでもなく深いがけ。落ちて行つてゐるイライザたちが豆粒みたいだつた。

ここでふわり、ヒューリックコースターで降り下すときのこせな感じが襲つてくる。

ちなみに、ナチはものすごいヒューリックコースター恐怖症。

しばらくの間、谷にナチの高い絶叫が響いていった。

## 予知（後書き）

「めんなさい」（土下座）

ほんと、実力考査が終わつてから書くとかのたまつて  
おきながら…

こんなに遅れてしまいました。

ごめんなさい、もう…しません（たぶん）

次回は…2月27日更新予定です

## 落ちていく先は…

死ぬ。死ぬ。死ぬ。

底までかなりある。こんな深い谷が学校の訓練場にあつたなんて思つても見なかつた。

半分、ナチは涙目になつて、そつ心の中でおもつた。

いま、ナチは重力にどんどん、ひつぱられていた。

先に落ちた3人はいつたいどうなつたのだろうか？

無事だらうか？それとも…

その瞬間、谷底にみょうな違和感を感じた。そう、まるでこの感じは…幻術だ。

すると、足先からじんじん冷たい感覚が走つていいく。

さつきまで谷底だつた景色が薄い七色の膜となり、ナチはそのまま膜につつこんだ。

膜の内側内はマンション2号室分が丸々入り込めるくらいの空間だった。

底にはクッショーンが敷いてあり、ナチはそのままクッショーンに激突する。

「ひー」

膜に突っ込んだときに、衝撃がやわらいでらしく、思っていたほどは痛くなかった。

「…ふう、助かった」

げつそりした声でそうつぶやき、ナチが顔をあげると、田の前にライザが立っていた。

「ああ…ナチ。よかつた、来た」

ライザは、疲れた顔でそう弱弱しくいった。

その向こうでは、レヴィイがココアを一気飲みしていた。（ベルはつ立てる）

レヴィイはぱはつと、ひとりじりひついた後、よつやくひらひらと、て大きく手を振った。

「……は？」

ナチはぽかーんとした表情をつくって、そうつぶやいた。

「ナチ、とりあえずこれ飲んで…落ち着くよ」

そういうで、イライザが熱いココアの入ったマグカップを差し出した。

「…うん」

ナチは喜びとおつに、ココアを受け取り、一口飲んだ。

のどを通って、ココアがすぐにじわり、と身体をあたためてくれた。  
おいしい。やつと、生きた心地がしてきた。一時はどうなるかと思つたし。

そつナチが「ココアを楽しんでいると、上から何かが落ちてきた。  
人だ。しかも男だ。金髪にオーシャンブルーの瞳…たしか、レイつて人だ。

「あつ…レイ君つ」

イライザがたちまち頬を高潮させ、レイにむかつてそつにつた。

レイはナチたちを見て一瞬目を小ちく見開き、口元もりながら、挨拶をした。

「まさか…ここにたどり着くとは、びっくりした」

小さくレイがつぶやくのを見てナチはたずねる。

「エハニハハヒヘヘヘ」

「いや……」リリは、一番田立ちに向くつてか、たどり着くのが難しい「ゴール地点なんだ」

「……く？」

ナチが思わず聞き返した。いま、あんた「ゴール地点つて言わなかつた？」

レイは特に気にした様子でもなく、もつと一度繰り返す。

「リリは、いくつか設置してある「ゴール地点の一つだ。……つていつた」

しばらく、ナチは田を大きくみひらいたまま固まってしまった。

落ちてごめん先は…（後書き）

はい、約束どおり2月27日に更新することができました！  
次回は、B×Gの設定について語りまくるやつだったりします。  
めんどくさくなかったら見てください（・ω・）

## 設定／筆者のどつでもいい努力の集大成

えーっと… 今回は予告してた通り、設定を公開しちゃうとこ「う」とで、辞書風にしてかきま

す。（なぜこれを企画したかと云うと、今説明しつかないと後々大変な事になるから）

みなさんは『ふうんこんな設定あつたんだ。』程度の目でみててくれるとうれしいな…

とおもつてます。ではではスタート

#バトル学園#

世界つても、10校近くしかないバトル専門学校の中の一つ。バトル専門学校のなかではトッ

プクラスの部類に入るけつじつずじかつたりする学校。

# B × G #

『バトルガール』の略。バトルガールは世界対抗バトルにでれる選手のこと。

『あれ？物語になんか男の子でてね？』と思った方。大丈夫です。彼はそれなりの理由で

で… か… ね… (汗)

#選考委員会 #

え… とですね。これに関して、ちょっと手違いがあつて、『選考委員』が『選別委員会』

つてなつてる話があります。『めんなさこ( - w - )

正しくは『選考委員会』ですので。覚えててくださいね w

』』』からじょっと文章入れますね。

え… と、世界対抗バトルはとある、浮遊している島『バトルアイランド』でおこなわれてま

して、そこには、いろんな地形を再現しているバトル・フィールド  
がいっぱいあり、そこで観

客は入島料金を払つてバトルを生で見ることが出来ます。

その観客にポップコーンを売つたりしている店や、土産屋まであります。

そして、観客はどっちのチームが勝つか、試合で賭けをする事が出来ます。

『俺は チームに賭ける!』とこの場合は チームの『賭け

チケット』の購入をします。

注意：ここでいう『賭ける』といつのは『負ける』に賭けるといつ意味です。

そして、試合開始前に、モニターで賭け金額が出されます。

例1） チームに賭けた（負けると賭けた）人が多い場合 …

チームにかかる金額が多くなります。そして、が負けたら、  
(相手チームにかかっていた金額 + かかっていた金額) ÷ かけた人  
数 = もらえる金額

もし、が勝つたら、

なんにももらえません。 チームに賭けたお金は全部相手チーム  
のかかってた金額に加

えられ、相手チームに賭けた人たちに分けられていきます。

注意：負ける確率が高いほど、かかる金額が高くなると思つてくれたらわかりやすいと思いま

す。

あと、賭けたお金は、勝ち負けによってですが戦つたB × Gに分けられてたりします。

で書くの忘れてたので補足しました。

あと、観客にはその日戦わない B × G や世界中のバトル専門学校の生徒達や教員もいたりします。

バトルアイランドで試合が行われるのは1週間～2週間程度です。出場チーム数で期間が決まります。

世界対抗バトル専門学校リーグは一般の人が長期休暇をとつて家族総出で行くくらいの人気ぶりで、開催者の世界各校の校長と島の管理者達はウハウハ大もうけです。

#でですね、世界対抗バトルに優勝したチームはマフィア壊滅などを行うイーグルガール略し

て『E × G』になります。この職業はバトル専門学校の女の子達にとつてはあこがれの職業

です。たとえ世界対抗バトルに優勝できなくても、2位3位にはいれば、『E × G』選考テスト

でクリアすればなれちゃいます。クリアできれば…の話ですが。

ちなみに『B×G』の選考に落ちちゃった生徒は来年の選考をまつてうけます。

でも、受けられるのは7回まで7年生で卒業ですので。だから、1年生で『B×G』に

なれる生徒もいれば、7年生でもなれず涙をのんで卒業…といふ生徒もいるのです。

あと、ナチたちの世界には『靈力』が使われて戦闘したりします。

試合で最初に『今日は靈力使用なしです!』とか制限をいわれ、それにあわせて戦闘します

銃弾でも世界には靈力を帶びさせて弾をつつ銃が一般化します。

電子機器とかには使われてません。電力の方が供給が安定してるので、大量に発生できるから

です。魔力も一応は確認されてるんですが、それは『B×G』や『E×G』関係の人しか知

りません。第一ほとんどの人間にはほんのちょっとしかないんです、魔力が。

だから、戦闘とかは、靈力がつかわれます。魔力はいろんな所での戦闘の歴史でも一回も出

てきてません。

ちなみに、魔力と靈力はそれぞれ反対の性質をもっています。だから靈力を魔力で相殺することも可能。

： ふう、こんなものでしょうか。なんか辞書風とかのたまつておきながらほとんどの文章です

ね。『めんなさい。最後まで見てくれた方、ありがとうございます』もし、私の執筆力のなさで物語上でわからないともがあったらこれを見て解決してください

それでもわからなかつたら、遠慮なくコメントをよこしてください。答えを返信します。

では、次回も見てください。がんばって執筆しますので！



## 設定／筆者のどうでもいい努力の集大成／（後書き）

ずいぶんと長くなってしまった…（-\_-;）  
これを読破してくださった方はかなり疲れたと思います。でも読んでくれて有り難うございます

この設定は前から説明するべきだったのに、執筆力のなさで書けなかつたことにして… こうやってまとめることが出来てとってもうれしいです。w

皆さん、これからまだまだこの物語は続きますが…  
がんばつて書き続けるので応援してください！

次回更新日は明日です。w

## 「ホールとそれから…

『…、ライ、『ホールなの？…？』

しばらく固まっていたナチとライザは声を合わせて、そう叫んだ。

「ああ…そうだけど。『気づかなかつたのか？』

レイはびっくりしたような顔でそういった。『気づいてるものとおもつてたらしい。

くつ、なんかすんげえムカつく…！

レイの表情がなんかカソにさわつたので、ナチは心の中でそうおもつた。

だが、ライザは全く思わなかつたようすで、『ぜんぜん気がつかなかつたわ…さすがレイ君』

などと、キラキラさせた瞳でレイをみつめていた。

一方のレイは途中で気づいていたらしく、驚いた表情を浮かべてはいなかつた。

ベルが「こっちの方向を指したのだ。たぶん何かあると踏んでいたのだろう。

そういえば…レイって人男だよね。何で女子学校の選考中にいるんだろう。

つてか何者だろ…

ナチはふと浮かんだ疑問をぶつけてみるとこした。

「…といつか、何でレイ君…は」に来たの?ウチの生徒じゃないよね。男だし」

「ああ…オレは」の学校に所属している情報屋。たぶんオレ以外にも何人か所属している

と悪ひ

「へえ…情報屋なんだ。カッコイイねーそういうの

とマイライザが途中で割り込んできた。まつたく…恋する乙女は盲田だ。

「ありがとう。…で、オレは今回の選考を校長に報告するのが任務だ。」

「ふうーん…あんた年いくつなわけ?」

などとレヴィも参戦してレイに質問をみんなで浴びせかけてると、上からなにかが落ちてくる

「…」

レイはその何かにいち早く気づき、ものすりこスピードでの膜の中からでていった。

「あつ……」

イライザがそういった時、それは膜にはいつてきた。また人だ。ただし、今度は少女だ。

赤毛のショートに、小麦色の肌。赤茶色の目は大きく、利発そうで、強気な雰囲気を感じさせ

せた。服装は白のキャミソールにジーパンといつらつな格好だった。「あ～…やつと着いた。つたく、エレン様も人使い荒いんだから。」

少女は大きく伸びをして、身づくろいをした。

そして、ポッカーンとした3人にもむかって元気よくこういった。

「こんにちはつ！選考委員会のものです。貴方達が合格者ですね？」

## 「ホールとそれから…」（後書き）

はいっ！予定通り更新できましたw  
物語りもやっと序章から抜け出せたかな？…って感じです。  
次回もよんでもくださいwそれでは

## リンダ

「えへっと…改めまして、私は選考委員会のリンダといいます。以後お見知りおきを

今回、貴方達は見事合格されたんで、」少しひそかに説明も兼ねてお迎えにきました。」

赤毛の少女、リンダは自己紹介を簡単に述べた後、そういうった。  
「…ほんとに合格なんだ。やつた2年生で合格できるなんて」

と、ナチがあっけにとられていた3人の中で一番最初に言葉を発した。

「お、おお…なんかそろみたいだね。実感わかないけどさ」

「やつた。受かった。うれしいわ。ね、ベル」

『……』

と、つられて残りの2人と一匹がコメントをしだす。

そして、リンダはその順番を見計らって、言葉を続ける。

「…」少しほん。と、言つわけだけでついて来てくださいね~

そういうて、リンダはいつの間にか持っていたリモコンのスイッチを押し込んだ。

と重たい地響きがしたかと思うと、ナチたちが立っている地面が割れて、何かが上昇してき

た

ナチたちは、あわてて躍躍してそれをよけた。

出てきたのは… 普通のよりもかなりでかいトランポリンだった。

「……は？」

3人がその、カツコイイ登場を果たしたトランボリンの使用意図の理解に苦しんでいると、脇に

いた、リンダがさつさと、それにおもいつきり跳躍して… 空高く飛び上がった。

3人がそう歓声を上げている間にも、リンダはどんどん上つていつ  
ている。

このトランポリンは特殊製りしく、  
跳躍出来る高さが半端ではない。

「ほいじゃ、いきましゅかつと…」

使用意図がわかつたので、レビューはやう言つと、さつさと飛び乗つ

て、跳躍した。

続いて、ベルも。

「あ、こいつちやたね。んじゃ、私が次いっていい?ナチ」

「あ、うん。いいよ」

そして、イライザも、『つまつましー』と氣合を入れると、床面へ跳躍した。

「……よし」

最後のひとつとなつた、ナチは、トランポリンをみつめ、そつそつやいた。

合格。去年受かんなかったけど。ついに合格した。

『B×G』になれるんだ。

そう思つた瞬間、やけに心臓が高鳴つた気がした。

そして、ナチは助走をつけて、トランポリンに思いつめり飛び乗つた。

グンッと身体が持ち上がる感覚がして、『あくび』『あくび』の高さまで、上つていた。

気圧の移り変わりの激しさに、耐えながらも、ナチはそつと笑顔になつた。

不思議だな…この谷を落ちるとからは怖くて仕方がなかつたのに。

今は、こんなにもうれしくて、ワクワクしてゐなんて。

## コンタ（後書き）

・・・久しぶりの投稿となりました（ - - - ）  
待つた方…いたらすみませんっ！

つと、今回はちょっと短めの投稿となりましたが、  
もうすぐで春休みなので、週末からバンバン書いていきたいとおも  
つてますので

みなさん、よろしくお願いしますw  
ではでは、また読んでくださいませ（ > < ）

あの、トランポリンで掛けを上って、ポートで川を下る」と一時間。ようやく、小さな集団が見えてきた。その、小さな集団にさが、合格者と選考委員の人々だつ

た。総勢20人弱がナチたち3人を迎えた。

ナチたちは、受付で、合格者名簿に自分達の名前がしっかりと書き込まれたことを確認して、

ようやく安堵のため息を漏らした。

「ふあー…なんか久しぶりに安心した気がする」

ナチは、係りの人からもうつた、ココアをすすつて、そつそつぶやいた。

それに、残りの二人と一匹がこつくりとうなずいた。

「…たしかにね。なんか森に入ったのが遠い昔のような気がする…」

イライザは湖水のような穏やかな瞳で空を見上げた。

『なごむねえ…』

3人でそう、和やかな表情でハモッた。

穏やかなひと時。苦労の跡だと甘いものが数倍美味しく感じられた。

と、その時。

「あ…ナチ…？」

と、凛とすんだような、きれいな声が聞こえた。ナチが顔を上げると、淡い金髪に、雪のよう

に白い肌。翡翠の瞳が印象的なきれいな少女が立っていた。

「クリスッ！！」

ナチは、空色の瞳をキラキラさせて、叫ぶと少女に飛びついた。

「わあ、久しぶり久しぶり！元気してた！？クリスッ！」

ナチの元気いっぱいの声に、クリスは微笑むと、『元気よ』と女神のようなまなざしそう返

す。

イライザは、少女の美しさに目を丸くし、レビィは口元をヒクヒクさせながら『ま…まあ…性

格は…どうだか…ね。ねえ、ベル！？』と必死にベルに同意してもうねつとする。

ナチとクリスはしばらくキャイキャイ話した後、クリスは『またね』と選考委員会の方へ去つ

ていった。

「はあ～！～相変わらず女神みたいな優しい子だつたあ～」

と、ナチは満足そうな笑みを浮かべる。

「私、ナチとあの…クリスつて子が知りあいだなんて、いまだに信じられないわ」

「そうそう。ナチ、あんな子といつ友達になつたの？」

レビィとライザに質問され、ナチは胸をそらし、ピースサインを作る。

「一年のとき、学食で。私がお財布忘れたとき、お金貸してもらつてから…」

ナチはふと、過去の記憶をたどる。

あの時、ライザがお休みしていた田のことが。その日、ナチが駆けつけてきたとき、大盛り

カツが売り切れ寸前だった。だところに、自分はお財布を忘れてしまった。

いつもは、忘れないのに。ナチがもはやいじまで…と覚悟を決めたときだった。

クリスが680円をナチにさしだして、あの女神のよつたな笑顔で、

『これ、良かつたら使つて?』

と言つてくれた。あのときの感謝の気持ちは忘れない…そのおかげで、自分は大盛りカツを食

べることが出来たのだから…

「…なんか、ただの画ごはんなのに、回想がスゴイ壮大にされてるわね」

レビイがそう、あきれたよつてつぶやいた。その時イライザはふと、何かに気づいたように、

顔をあげて、遠くにいるクリスの横顔をみつめた。

「思い出した…あの子、スポーツ雑誌に載つてた。スゴイ有望で、何でも一年生のとき選考に

受かつたって…で、去年あんまりにも早すぎるからつて、一年学習措置をとられた人よ

『…』

ナチとレビイが一斉にクリスの方へ振り向いた。

クリスが楽しそうに委員の人しゃべつている。心なしか委員の人は緊張しているように見えた。

『一年生で…合格』

今まで、選考で1年生は受かったことなどなかつた。それくらい選考は技術と、体力と、めげない精神が必要な、難関なテストなのだ。

それをパスしたとなると……かなりの資質の持ち主だ。普通では考えられない。

今年、校長が『豊作だ』と言つていたが、たぶんこの事をさしていつのだらけ。

「今年は、すんごい試合になりそうね……あたしらも頑張んなきや」

イライザの言葉に、ナチとレヴィ（ヒーロ）は静かにつなずいた。

その瞬間、空に花火が打ち出される。選考受け付けの終了合図だ。

「以上を持ちまして、選考を終了させていただきます！」

選考委員の者が力いっぱいそう叫ぶ。ナチにはその声がやけに大きく感じられた。



## 金髪の少女（後書き）

…「めんなさい、すっごい遅くなりましたね  
待つていてくれた方申し訳ありませんでした！（土下座）  
これからはできる限り早めに投稿します（-w-）  
次回の投稿は…明日ですッ！！

## 終わりとそれから

その場で『ワツー』っと歓声が上がる。選考が終わり、正式に自分達はB×Gになることが出来たのだ。

「よつしやあ！」

ナチは拳を天へと突き出し、やつ叫び、イライザは『ああ～終わつたあ』と、その場に座り込

んだ。レビィは『終わった、終わった。』と大きく伸びをしていた。

そんな歓声のなか、一人の人間が空から降ってきた。

どちらも黒の服に身を包んでいる。あれはエレンとその部下だ。

一人は、地面に降り立つ。

それを、ここにいる全ての人間が注目していた。

エレンは簡単に身づくろいをすると、部下から拡声器を受け取り、おもむろにいづ。

「みなさん、初めまして。選考委員長のエレン・ポーラと申します。こつちは私の部下。」

エレンの紹介に、隣にいた部下の少女は丁寧にお辞儀をした。

「Jの後、名簿を基に正式に『B×G』に登録しますので、みんなは一応解散といつ」と

なります。詳しいことは後日改めて。以上!」

エレンの簡潔な言葉に、もづきょとなんか話があると思つていた人々は、少しきょとんとしたが、素直に帰つていった。

疲れ果てたナチたち一行を迎えたのは、先ほど『B×G』の選考があつたと聞かされた、同級

生の大群だつた。その迫力に、心身ともに疲れ果てたナチらは思わずため息をついたが、誰も

そんな事を気にもせず、ナチたちに素直におめでとうと叫つたりしたが、中には明らかに悔し

そうにしている生徒達もいた。

無理ないよなあ…とナチは思った。熱意のある生徒を選ぶとはいえ、選考は一ヶ月後だと聞か

されていたのだから、納得できない人がほとんどだろう。

そう考へてみると、自分達の運のよさにかなり驚いてしまった。

しかし、そんな驚きをもみ消すよつこ、やれどんなのだった、とか受かったのか?、などの

質問が押し寄せていたので、手短に答えながらナチとイライザ、レヴィ（+一四四）はそれぞれ

自分の寮へと帰つていった。

その後3人は必要最低限のことをした後、倒れるよつこベットにダイブしたそつな。

## 終わつじわれから（後書き）

… じゅうじゅうへ投稿していなかつた上に… 短い…！

申し訳、ぜこまさん（・・・）

じゅうじゅうも同様、週間、週間に投稿するのになつました…

ので、みなせん… 眼捨てなこでトヤレニミ

次の日の朝、いつも通り6時にがんばって鳴った目覚ましの苦労も知らず、

いつもよりナチ・クリストファーは起きなかつた。

【…はあ、また起きてくれませんでした…】

ナチがぐーすか眠りこなしている隣で、今日もがっくつと肩をおひすく（めつを久しぶりの登場）

がいた。

昨日もあんなに『起きひ』といったのに…

ため息をつきつつ、手馴れたしぐれでナチのまへに平手を食らわせようとして…

「いらっしゃあああああ…！…ナチイ…！…何時まで寝てやがるつ『餌けもんだぞつ……』

怒鳴り声とともに、ナチの部屋のドアが蹴破られ、黒い『何か』がページの田の前を通り過ぎた。

と思つと、次の瞬間にはナチは背負い投げをされていた。

ピイが繰り出すような平手よりも何千倍も強烈な朝の攻撃に、ナチは一瞬で目が覚めた。

「ふはつ！…な、何つ！？」

「届けモンだ…きの「五時半に取りに来い」といつたはずだらうが  
つ…」

混乱するナチの前にH・M・ハンターは「立ちして、手に持つ  
ていたものを

ナチの前に突き出した。

「と…届け物？」

勢いで受け取ったナチは、怪訝そうな声を上げて届け物をビリビリ  
と破る。

すると、包みからは真新しい制服が出てきた。

白いブラウスに黒のジャケットに黒のスカートに黒のハイソックス  
に赤いリボン、

ジャケットには『B×G』の金文字が紋章として描かれている、ほ  
とんど黒ずくめの制服。

「これって…B×Gが着る制服ですよね」

「やうだ。おまえ今日から『B×G』なんだぞ？自覚あるのか？」

そうだ。やうだった。

戦闘系学校に通う女子の憧れの職業、『E×G』になるための資格をもつ『B×G』に。

「つたく、ちつさと着がえて飯食つたら第一訓練場に来いよ。遅刻したらスクワット1000回追加な。

覚えとけよ」

エマはちつこい残すなり、来たときと同様、風のよつよつていつた。

「…今何時、ペイ」

「現在は午前6時。こんなに早起く起きたのは入学式以来ですね、ナチ」

「…はあ、眠い」

そつづぶやき、しぶしぶ着がえ始めた。

食堂に行くと、もつすでにイライザが朝食を食べ始めていた。

真新しい制服を着ているイライザは、ナチを見かけるなり、大きく目を見開いて固まつた。

「ナチー? アンタどうしたのよ? こんな早く起きるなんて…」

「ヒマが…」

そう言つて、真新しい制服を指差せば、『ああ』トイライザは大体は想像がついたらしく、

苦笑いを浮かべながら、朝食のクラブサンドをかじつた。

ナチも、朝食を頼みに行こうと席を立つがその際、後ろを通りかかつた誰かにぶつかってしまう。

「あ、」めんなさい

そういうつて振り返ると、昨日まで一緒にクラスだったクラスメイトの鈴リンだつた。

「…ナチー… B×G の制服じゃん、  
うりやまじこ…」

そう言いながら、悔しそうにナチの制服を眺め回す。そういえば彼女も選考に運良く参加していた。

しかし、この様子からじて落ちてしまったのだつ。

その時ふと、視線を感じてナチが顔を上げると、数メートルむこうのナチと同学年の子が

あわてたよつて田をそらす。

それを見て、ナチはほんの少し、落ち込んでしまつ。

このバトル学園は戦闘能力、学力の合計でクラスを分ける。

一番上からB×G、SS、S、A、B、C、Dとあり、ナチは戦闘能力はこの学校の平均から

見ても、まあ高い方だ。しかし学力が下から数えたらすぐといづれベルなので

一番下のクラスにぶち込まれた。

しかし今回の選考で運が良かつたとはいえ、『B×G』になつた。最低ランクのクラス

から、生徒の憧れのクラスへの栄転。

同学年の他クラスの人、しかも選考に出られなかつた人の大半は快く思わないだろ？

…などと考えていると

「ナチ、来年こそはアタシもB×Gになつてやるからねつ

鈴がそういつた声でわれに返つた。

「う…うん、待つてるよ」

そして、さじちないが笑顔を作る。それをイライザは静かに見てい

た。

鈴が立ち去った後、ナチは朝食のセルフのパンと朝定食と牛乳をとつてきて、

かなりのスピードで食べ始めた。イライザはもつ食べ終わったらしく、後片付けを

するために立ち上がった。その際、

「あんたが落ち込む必要ないでしょ。」

とナチのほっぺをつまみ、ため息混じりにそう言つた。

しばしの間、何のことかよくわからず、最初はぽかんとしていたが、理解したとき

思わず笑つてしまつた。

さすがはイライザ。よく見てる。

ナチはひとしきり笑つた後、食べ始めたときのわりに倍のスピードで食事を再開した。

その後、訓練場へいつものように一人で行つた。違つたことといえば、

遅刻しなかつたことだった。



## 昨日と今日では（後書き）

：久しぶりの投稿です（・w・・）  
皆さん、この作者のサボリ癖とこのゲリラ的な投稿に  
慣れてきましたか？（ ウザイ人です）  
でも！定期的に見ていてくださいねっ！！もしかしたら投稿して  
かもしだせんw  
では、次回も読んでみてくださいなつ：では？（・w・ゝ）

## 最初の課題

午前8時、バトル学園の第1訓練場には20名弱の『B×G』が集まっていた。

今日は、新B×Gにとつては初の授業。なので、朝からみんなハイテンション気味。

まあ、当然ながらエマが入ってきているのに気づいていなかつた。

「…朝から豪氣じやねえか、てめえら」

誰にも聞こえないような声で、顔を引きつらせながらエマはつぶやくと、無造作に

丸くて、導火線がついていて拳ほどの大ささの物を取り出した。それには

どくろマークがプリントしてあり、そのマークの下には『危険!』と書かれてあつた。

エマは、明らかに爆発物であつたその導火線部分に、ライターで手際よく着火し、

生徒達の頭上方へ高く放り投げた。

「ふんっ！」

「……………！」

数秒後、ぐぐもつた爆発音とともに、濃密な煙が生徒達の頭上から広がり、生徒たち

の悲鳴が上がった。

エマが投げた爆発物は彼女の雇い主、この学園の校長によって作られた『対生徒用の爆弾』で、人間が吸うと数分間笑いがとまらなくなる煙が

たっぷり詰め込まれていてるらしい。現に爆心地にいた生徒達は悲痛そうな笑い声を

あげている。

とはいって、ここにいる生徒はB×G。優秀な数名の生徒は爆発寸前に脱出して被害を

免れていた。

「……………生意氣なやつめ」

エマは面白くないみたいにつぶやくと、免れたメンバーを記録すべく、クリップボード

を取り出してチェックし始める。

「うしだ、細かいことも教師によって、しっかりと評価され、今後のB×Gの

バトル大会出場権に響いてくる。

だから、B×Gは授業では常に『気を抜けない』のだ。

「今日から、新B×Gの授業が始まる。B×Gの授業ではさつきの様な事もビジバシと

やつてくから、気を引き締めておけよ」

『はい……』

Hママの言葉に、先ほど被害を受けた大多数の生徒は、苦々しく返事をした。

「よひしこ。で、私はこの、1～3年のB×Gの担当する」とこんなつた……私は基本スバルタ

だ。だから覚悟じとけよ

「つくれ……」

ナチは、他の生徒のブーリングにまぎれて思わずそつ漏らした。

D組のときも、Hママが担任でビシバシじこかれたのと、ここに来てまたエマが担当とな。

心の中で、うかつす感じでほいたもののやつぱり嫌だった。

「ああ？なんか文句あんのか、てめえら……」

生徒のブーリングにキレたのか、エマが腹から押し殺したような声を出す。

同時にエマは全身から薄く殺氣を立ち上りさせる。

それは、生徒を黙らせるには十分効果があった。全員が身の危険を感じ押し黙る。

とたんに、エマの殺氣も搔き消えた。

エマは戦闘態勢を解くと、腰に手をあて、『『氣を取り直して』といひつけ

咳払いをした。

「さて、今日から授業を始めるぞ……といいたいところだがお前らにはまづ

授業よりも先にせつてもらわなければならぬ事がある。… B × G はいくつかの

チームに分かれてもらひ、とこうことは知っているな？ そのチームをまず作れ。

それが出来るまで実技の授業はしない

## えーっ

また、生徒のブーイングが嵐のよつに巻き起しつた。

しかし、Hマはこの反応を予想していたようで、表情をかえずに嵐が治まるのを

待つてから、話を再開する。

「…とにかく、まだお互いの名前も知らないような奴が『じろじろ』るだろうが、

7日後までにチームを4・5人作れ。…それが最初の課題だ。せいぜい頑張れ」

エマが以上だ、といわんばかりにそばにあったパイプ椅子に腰を下ろした。

しばらく、誰も何も言わず、困惑げな表情をつかべつゝ辺りを見回すだけだったが、

やがてぞろぞろと生徒が動き出す。ナチとイライザも一人で流されるように出て行つた。

生徒が全員訓練場から出て行つたあと。

「調子はどう、Hマ？」

と、突然椅子に座っているHマの背後から声が聞こえた。

振り向くと、そこには空色の瞳を持つ小柄な老婆……校長がいた。

「何のよひです、校長。いきなりそんな所に現れて。なにか気になつたことでも？」

「いいえ、なにも。強いて言えば、書類の山から逃げてくるためかしらね」

校長はそつそつと優雅に微笑んだ。

校長の言葉を聞いて、Hマは思いきり顔をしかめた。

「またですか……まったく、私は前からあれほどサボるなと言つてきたのに」

Hマのため息交じりのつぶやきに『はいはい』と校長はあっさり一蹴した。

「で、Hマ今年のB×Gはどう? 教え甲斐があるでしょう」

「…まだわかりませんよ」

といいつつ、Hマはすでに気になつていて、生徒が何人かいた。

毎年彼女はB×Gを見てきているが、今年は新人に有望な人がけつこういる。

だから、今年のB×Gの成長が楽しみでしょ。つがない。

わざわざ出したばかりの課題のチーム作りもだ。

いつたいどんなチームを生徒達は作って来るのだろうか。

「一週間後が楽しみだ」

ママはかすかに微笑み、そつそつと語った。

## 最初の課題（後書き）

え～と、約二ヶ月ぶりの投稿となりました（ -w- ）

毎度待っている方、いたら「ゴメンなさい（土下座）

今日は、やつと実力考査が終わったので一気にこれを書き上げましたw

まだまだ終わりには程遠い地点にいますね（ - - ）

これからスピードを上げていきたいなって思っていますw

ではでは 次回も読んでください（ ^w^ ）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9195c/>

---

B×G

2010年11月24日16時42分発行